

明珍 昇著 『近代詩の展開』 書評

吉 田 永 宏

先に詩集『日時計』『夕陽の柩』を上梓された詩人・明珍昇氏が、今度は日本近代詩の歩みを一望の下に収めるべく、『近代詩の展開』を刊行された。詩人であり同時にその研究者たらんとされる氏の

最近の旺盛なご活動の結果としての本書の刊行に対して、まず敬意を表しておきたい。

著者の意図されるところは『近代詩の展開』なる題名に十分伺わ

れるのであって、日本近代詩の展開過程をそれぞれの作品に即しつつ、しかも実作者の眼で明らかにし、一望の下に収めてみたいという点にあるのであろう。内容は「近代詩の展開」「昭和詩の主流と異端」「啄木における強さと弱さ」「ルポ・写真・比喩」の四部から構成されているが、九十一頁の全体量の中で「近代詩の展開」が五十六頁までを占めているのであるから、このテーマのものが当然中心ということになる。

しかしながら、「△新体詩▽から近代詩へ」「象徴詩の流れ」「口詩自由詩の時代」「民衆派の役割と新興勢力」「△詩と詩論▽の運動」「昭和の現実詩」「(付)安西冬衛・詩と背景」という、その限りでオーソドックスな区分に従いつつ、その展開過程を一望の下に収めようとするのは、まず量的にみて不可能に近い。しかも本書は大学に於ける講義用の教材としての性格をも持っている故か、外山正一の訳になる「テニソン軽騎隊進撃の詩」(「新体詩抄」)に始まって安西冬衛の「竜の落し子」(『大阪朝日新聞』昭和三十六年六月十二日掲載)に至るまでの、五十九篇の詩篇の全てか或いは抄がこの章に収録されているのであるから、それを繋いでいくには余程の技術的な手際の良さが要求されるわけである。その点、器用さに於ては定評のある著者の整理ぶりは鮮やかである。高等学校に於ける国語科の教材としての△国文学史▽を読む度に、これだけの頁数でよくも膨大な歴史の歩みを整理し得たものだと一種奇妙な感慨にふけるものであるが、この「近代詩の展開」を読了した後でも同様に感心させられた。

ところで、これだけの量で展開の跡を位置づけようとすれば、斬り捨てご免的な断定は或る程度まで避け得まいが、やはり本書の叙

述の中で気になる箇所も少なくはない。例えば、藤村『若菜集』についての叙述の中で「六人の処女」に触れて、「作者が自己感情をそれらの処女に変身させることによって、抑圧された自我の解放を象徴的に歌いあげたものである」としながら、「もちろん、その自我はわが国の内部現実から出発した自覚からではなく、外国から揺り動かされ夢想されたものではあった」と断定されている点についてである。『若菜集』刊行の明治三十年に至っての「自我」が本当

に「わが国の内部現実から出発した自覚から」ではなかったと断定することができるとか。自由民権運動の挫折を経験した政治的時点からみても、内海文三を生み出した文字的经验からみても、躊躇なしに断定するわけには行かないと思う。また、啄木の項で、『呼子と口笛』を取り上げつつ、「詩における思想の情緒的等価物の作用は、社会主義者啄木における主体性の脆弱さを露呈する」とか、「日本近代詩は、啄木の出現によってその領域に初めて社会主義的思考を導入することができた」、「弱さと見るべき浪漫的性格に却って文学作品としての情操のはばたきを感じられる」、「大逆事件後は時代に順応する個人主義的人道主義的文学や耽美的傾向に流れ入った」などといった叙述にもそれが伺われる。つまり、この種の史的説明に内在する制約(それは或る程度不可避的なものではある)が認められた上で、なおかつ著者の安易な用語法に引っかけからざるを得ないのである。「時代に順応する個人主義的人道主義的文学」とは具体的にどのような文学作品を指しているのか、そもそも、個人主義的人道主義的なるものがその性格上時代に順応するものなのかどうか、などという点について一切が不明のまま放置され、論証抜きにいきなり、一定の性格を付与された概念とし

て提示されているわけである。

また著者の啄木に対する多大の関心は本書の「啄木における強さと弱さ」という章となつて表わされているが、ここでも、「実存者啄木の存在感覚も、その個人的性格的資質的なものよりは、現象における認識により多くかかわっていたことは否めない」として、「そこに啄木における主体性の薄弱も指摘されよう」といういささかオポチュニスティックな結論を導き出しておられるが、これでは「単に彼における逃避であり、弱さであるとしてのみ捉えるべきものではない」との短歌についての折角の言も台なしであろう。啄木を唯物論者といい、浪漫主義者といい、果ては「社会主義者啄木の主

体性の薄弱」(付記「呼子と口笛」の限界)などといわれるに至つては、その定義の多様性と便宜的な観点とに読者はいささか立ち往生せざるを得ないのでなかろうかと思つたりもする。これらの点については、著者の今後の実証的な作業(それは義務でもあろう)に待ちたいと思ひ、それを念じてやまない。

明珍昇著『近代詩の展開』(昭和42年7月1日・教育出版センタ

1・九二頁・二〇〇円)。

著者・明珍昇氏は、本学大学院修士課程昭和34年修了。現職・大阪府立高津高等学校(定時制)教諭、大阪芸術大学他講師。